

## 「ジュリアス・シーザー」地誌考

その他（別言語等） のタイトル	Shakespeare's Place-Names Commentary : Julius Caesar
著者	竹内 豊
雑誌名	室蘭工業大学研究報告．文科編
巻	7
号	3
ページ	363-392
発行年	1972-09-15
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10258/3339">http://hdl.handle.net/10258/3339</a>

# 「ジュリアス・シーザー」地誌考

竹 内 豊

## Shakespeare's Place-Names Commentary *Julius Caesar*

Yutaka Takeuchi

### Abstract

This commentary is designed to treat the names of places in Shakespeare's plays. Although the names of places are formally noted in many editions, they are summarily dismissed—usually in a line. The names of places stand in the background of the natural environment, and they are closely related with history of man.

This commentary is attempted in the belief that knowledge of the names of places is an important step in understanding human works in many fields—especially in literature.

“Some preliminary preparation is necessary to understand any great works of art, and especially those which belong to a past age.”—G. B. Harrison

土地あるところ、必ずや人住み、歴史を生むであらう。その歴史とは、哲学であり、文学であり、宗教であり、美術、音楽である。そうしてしかも人は風土あるところ、その風土の人であり、それが文学であれば、「イギリスの文学」となり、「ドイツの文学」となる。それは「シェイクスピアの文学」となり、「ゲーテの文学」となる。それはシェイクスピアの『ハムレット』となり、ゲーテの『ファウスト』となる。その自然の背景と人間と歴史と不離の関係にあるものに地名がある。しかしながら地名は文学作品においてもその関心が人名に比して度合が薄い。シェイクスピアの作品においても各種のテキストの注は余りにも簡単で、なかには全く触れていないものもある。これ

は彼等イギリス人にとっては自明だからというものではない（われわれが自国の地名についても必ずしも自明とは限らない）。シェイクスピアの舞台はイギリス本土はもとより隣接諸国、遠くはアジアとその範囲は広い。

地名の理解は、畢竟史的背景や他の文学作品との関連を知ることとなり、文学研究の一支柱と思われる。

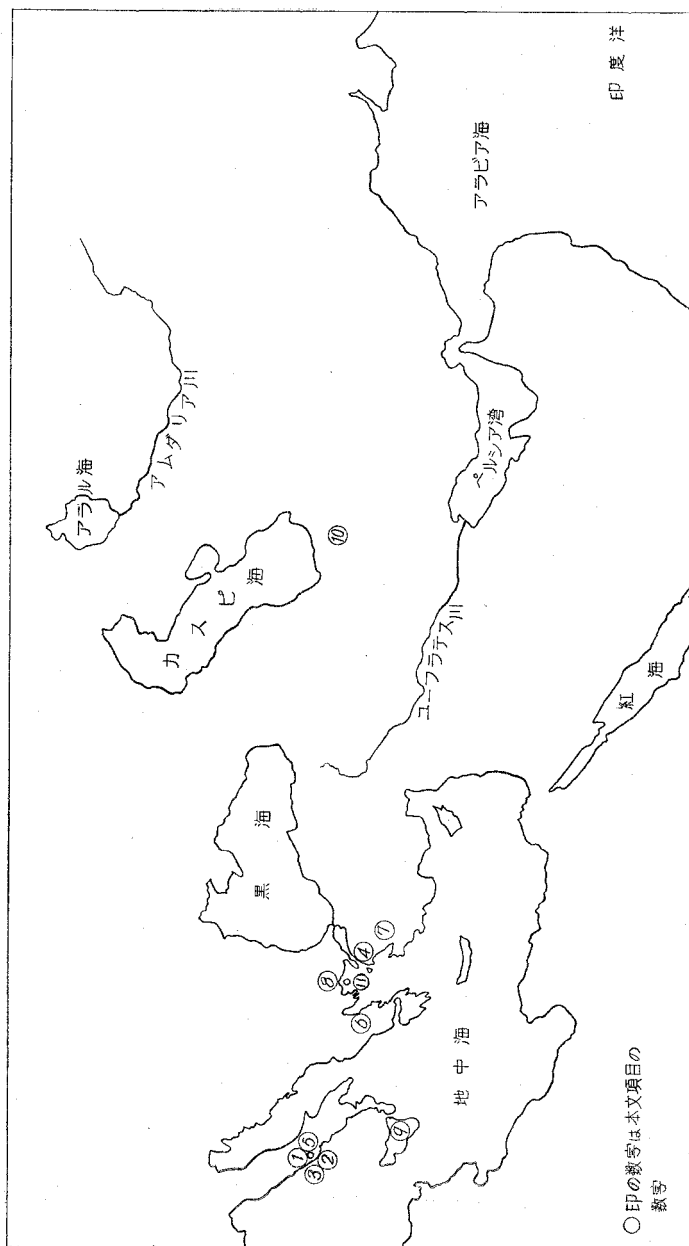
昭和44年夏、「シェイクスピア・ツア」で訪れたシェイクスピアゆかりの地は筆者に強烈な印象を与えた。本考はそれが一つの契機となって生まれた。

シェイクスピアには37篇の劇があり、逐次コメントをつけてゆく予定であるが、本篇はその *Julius Caesar* 篇である。作品読解の便宜に合わせて、コメントは作品毎とし、更にその地名の記載の順序も劇の進行を追った。見出し語の地名の後に付した数字は、それがテキストに出た最初の個所を示したものである。

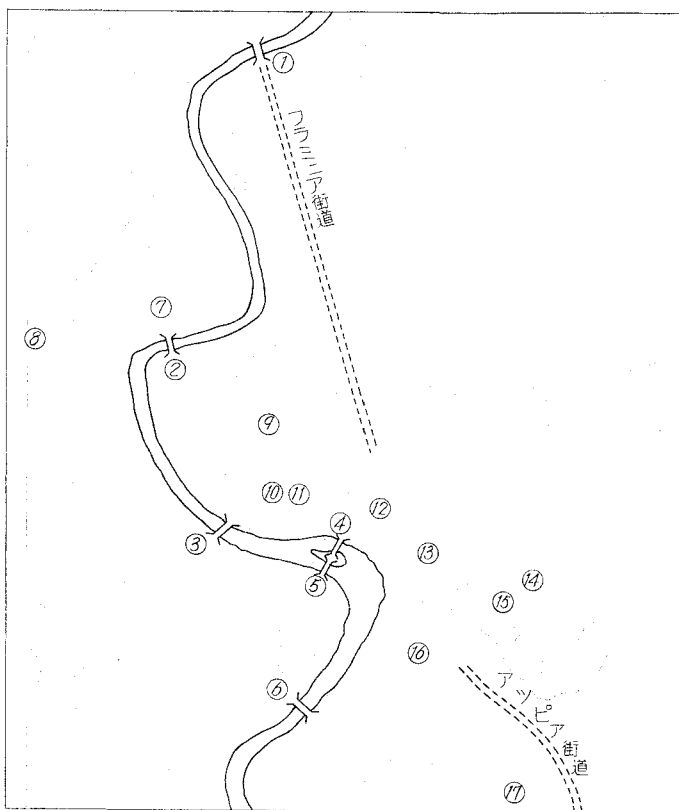
本劇はローマの歴史事件にその主題がある関係上、説明すべき固有名詞はあえて英語式に統一せず、大半を原発音によったが、それも必ずしもアカデミックな正確を期さず、日本で広く使われて耳慣れた形（例えばカイサルをシーザー、ユピテル（イウーピテルともいわれる）をジュピターとしたように。また筆者のデンマークでの経験では文豪アンデルセンは「アナスン」と発音されていることから思えば現地発音に従って「アナスン」とすべきかも知れないが、しかもまた最近外国名は現地発音で表記するのが慣例となってきているにしても、現段階でアンデルセンをアナスンとするのは混乱を招くこととなるので本文中にも従来通りの慣例に従った。）にした。そのため英語またはイタリア語（時にラテン語）での呼称を並記した。しかし一度外国名を出したものについては二度目からはそれを省いた。また注に廻ったものについては本文中では外国名を省いた。また生年、没年その他の記録については伝承あるいは古い昔のもののために定説のないものがあるが、それについては出来るだけ異説をあげるようにした。

# 1. Rome 第1幕 幕開き 41.53N 12.30E

イタリア語及びラテン語では Roma と綴る。古代ローマ帝国以来その首



附図1 関係総図



- |                      |                  |
|----------------------|------------------|
| ① ミルヴィオ橋             | ⑩ ポンペイウスの劇場      |
| ② アエリウス橋 (サン=アンジェロ橋) | ⑪ ポンペイウスの柱廊      |
| ③ シ ス ト 橋            | ⑫ ジュピターの神殿       |
| ④ ファブリチオ橋            | ⑬ フォーロ・ロマーノ      |
| ⑤ エミリオ橋              | ⑭ コロッセウム         |
| ⑥ スブリーチョ橋            | ⑮ コンスタンティヌス大帝凱旋門 |
| ⑦ 聖天使城 (ハドリアヌス帝霊廟)   | ⑯ チルコ・マッソ        |
| ⑧ ヴァティカン市国           | ⑰ カラカラ浴場         |
| ⑨ カンポ・マルツィオ (マルスの野)  |                  |

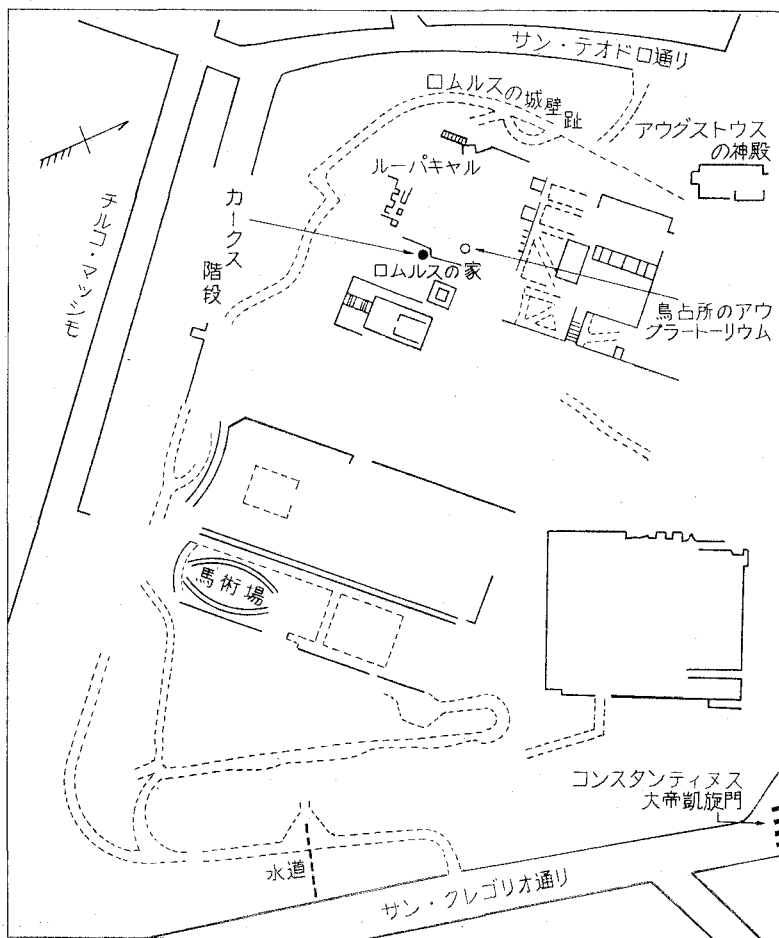
附図 2 ローマ市中心部 (1)

都として栄え、今日ではヴァティカン市国<sup>1)</sup>をかかえる聖都とし、また国内  
 到るところに各時代の文化遺産をもつイタリア文化、政治、学術の中心都市、  
 首都である。

「ローマ」の名の起源は多くの学者、史家が多くのことを語って一致をみない(注8)参看)。またローマは‘Eternal City,’ ‘City of the Seven Hills,’ ‘Holy City’ とも呼称されることがある。

町はテヴェレ川 Tevere の河口から約 25 km, その兩岸にまたがるが, 中心は左岸にあり, 右岸にヴァティカン市国がある。伝承では前 753 年 4 月 21 日<sup>2)</sup>にラテン人の一派によって建設されたといわれ, その最も古い居住地は七つの丘(3項参看)の一つであるパラティノ Palatine Hill (Monte Palatino (伊), Mons Palatinus (羅))とされている。故にフォーロ・ローマノ(3項参看)がローマの心臓とみるならば, このパラティノの丘はまさにローマ発祥の地である。丘は高さ約 50 m, 周囲約 2 km, 乾燥して住居に適す健康の地であった。このため共和時代に貴族の邸宅が建ち, 帝政時代には皇帝の宮殿が建った。そのため今日, 宮殿を意味する言葉はこの語から生じている。すなわち, palace (英), palast, pfalz (独), palais (仏), palazzo (伊)。丘の近くはテヴェレ川が流れ, また辺りは湿地(沼)帯(注22)参看)であったから軍事的にみて, 敵を防ぐに格好の地形であったと考えられる。この丘にアルバ・ロンガ Alba Longa (ローマの南東約 24 km の古代ラテン人一派の居住地)の王ヌミトル Numitor がいた。しかし王位継承権は弟のアムーリウス Amulius<sup>3)</sup>にもあった。「アムーリウスはすべてを二つに分けて, 自分は王位よりも財宝とトロヤ(4項参看)から運ばれた黄金の方を取ったから, 王位はヌミトルのものとなった。ところがアムーリウスは財宝を手に入れたためにヌミトルよりも有力になったので, 安々と王位まで奪ったが, ヌミトルの娘から子供が生れるのを恐れてこれをウェスタ(注28)参看)の祭女に任じ, 一生結婚せずに処女を通すようにさせた。この娘の名を或る人はイーリア, 或る人はレア, 或る人はシルウィアだと言っている<sup>4)</sup>。幾らも経たないうちにこの娘はウェスタの祭女に定められた掟に背いて(注28)参看)妊娠していることが露見した。<sup>5)</sup>……二人生れた子供は大きさも美しさも人並すぐれていた。そのため一層恐れをいだいたアムーリウスは召使に子供を棄てて来いと命じた。この召使の名を或る人はファエストゥルス Faustus<sup>6)</sup> だといい, 或る人は拾った人の名

だという。とにかくその召使は子供を槽に入れて棄てるつもりで川まで行ったが、水嵩が増えて逆巻くのを見て恐れをなし、辺まで行かずに岸の近くに置いて立ち去った。川が溢れると洪水は槽を持ち上げて浮べたまま静かに川上へ運んでいい具合に軟かな場所に持って行った。そこは今ケルマロス Kermalus<sup>6)</sup>と呼んでいるが、昔ゲルマヌス Germanus と言ったのは多分、兄弟をゲルマニー germani と称したところから来ているのであろう。…



附図 3 ペラティノの丘

…さて二人の子供が棄ててあるところへ牝狼が来て乳を飲ませ、啄木鳥もそれを助けて食物を運び番をしたと伝えている」<sup>7)</sup>。この牝狼のねぐらのあったところ<sup>8),9)</sup>からパラティノの丘へ昇る階段があって、カークス階段 Cacus Stairway, Scala di Caco, Scalae Caci (附図3 参看)と呼ばれていた。この辺りにファエストゥルスという羊飼<sup>10)</sup>がいて、狼に育てられている双生児を見付けて家に連れ帰り、二人を育てはじめた。「ファエストゥルスが拾って育てたことは誰も気付かずにいた。……二人は獣の乳を吸っているところを見られたので乳房という言葉からロームルス Romulus 及びレムス Romus と名づけられた」<sup>11),12)</sup>。そうしてある時偶然の出来事から二人は自分たちの出生の事を知り、アムールウスを討って、祖父のヌミトルを王位に復させた。そうして彼等は「独立して住居を構えることに決し、初め育てられた場所に町を建設することにした。……二人は都市建設に尽力したが、忽ち場所のことから不和を生じた。ロームルスの方は謂わゆる『直四角なローマ』(ローマ クワドラータ Roma Quadrata。パラティノの丘を主とする)を築いたからその場所を都にしたいと言い、レムスの方は、その名からレモーニウム Remonium と言われ今リグナーリウム (この名は伝わっていない。ブルータルコスの聞き違いか。)と呼ばれているアウェンティヌスの丘 Aventine Hill (3項参看)の堅固な場所を都にしたいと言った。二人は吉兆の鳥によって争いを決することに同意して別々の場所に座を占めたところ、レムスには六羽、ロームルスにはその倍だけ兀鷹が現れたと言われる。尤も人によるとレムスは本当に見たのだが、ロームルスは嘘をついたのに、丁度レムスがやって来た時ロームルスに十二羽現れたのだということである。……レムスは欺瞞に気づくと大いに怒り、ロームルスが城壁の周りに廻らさうとして壕を掘っている間に、その仕事を嘲ったり妨げたりした。遂に壕を跳び越した時、或る人によればロームルス自身に、又或る人によればロームルスの味方の一人ケレル Celer に打たれて斃れた」<sup>13)</sup>。これがローマ建設の伝説で、時に前753年4月21日であったといわれる(注2参看)。今日この4月21日をローマはローマ建国の日としている。今日パラティノの丘には「カークス階段」「ロームルスの家」Casa



di Romolo や「鳥占所のアウグラトールム」Auguratorium (ラテン語のまま使用されている。(伊) Auguratorio) が残っている。ローマルスはこれより 30 余年 (前 753 年~716 年) にわたり勇猛果敢ながら深謀で輝かしい治世を行なったが、7 月のノーナイ nonai (7 日) の日マルスの野 (5 項参看) で闘兵中忽然と姿を消したため<sup>14)</sup> 人々は彼が昇天して神になったと信じ、クイリヌス<sup>15)</sup> の名のもとに崇めて祀った。行年 54 歳といわれる。

帝政時代 (前 27 年以後) におけるローマ市の繁栄は目ざましく、特にアウグストゥス帝 (注 27 参看) はローマ市の美化に力を注ぎ大きな土木工事が行なわれて煉瓦造りの町は大理石の町と変わり、今日みられる廃墟から推して、かなりの競技場、劇場、数々の泉、大浴場もつくられていた。4 世紀には 36 の大理石の門、37 の城門、25 の街道、8 つの橋、29 の大通、423 の町とこれらに交差する無数の道路、2 つの大市場、8 つの大広場、11 のフォーラム Forum (広場)、10 のバンリカ Basilica (会堂)、2 つの円形劇場、2 つの劇場、2 つの競技場、1,152 の泉、11 の公衆浴場、856 の個人浴場、190 の穀倉、254 の製粉所、28 の図書館、4 つの営舎をローマは有していたといわれる。

## 2. Tiber I. i. 50

イタリア語で Tevere。古くは Albula と呼ばれていたが、後この川で溺死したアルバ・ロンガ (1 項参看) の王 Tiberinus の名から Tiberis, Tibris あるいは Tiberinus と名づけられた。イタリアで最長ではないが<sup>16)</sup>、最も有名な川で、アペニン山脈 Tuscan Apennines にその源を発し、Pieve Santo Stefano (43.40N 12.02E) の町を南に下がり、Perugia (43.07N 12.23E) の市の東を流れてウムブリア盆地 Umbria に入り、ラティウム Latium の平原を貫流し、ローマ市内に入って約 20 の橋をくぐり、延々約 393 km 流れて、チレニア海 Tyrrhenian Sea に注ぐ。ローマ市内を流れるためローマ及びイタリアの発展の動脈となっている。この川にかかる橋のなかには前 64 年のファブリチオ橋 Ponte Fabricio が現存する橋のうちの最古のものである。また「壊れた橋」Ponte Rotto と俗称されて、その一部分が残っているエミ

リオ橋 Ponte Æmilius は前 181 年～179 年のものである。南地区にかかるアベンティノ橋 Ponte Aventino のその原形はテヴェレ川にかけられた一番最初の橋スプリーチョ橋 Ponte Sublicio, Pons Sublicius であるが、これはアンクス・マルキウス(注 22)参看)のかけたものである。また北地区、遠くフィレンツェに至るフラミア街道 Via Flaminia にかかるミルヴィオ橋 Ponte Milvio (Milvian Bridge, Mulvian Bridge) は前 109 年にかけられた橋である。この橋の近くで行なわれたコンスタンティヌスとマクセンティウスの戦いについては注 30) に詳しい。この橋は 13 世紀になって元の橋の基礎の上に新しく建てかえられ、19 世紀になって更に修復されたものである。

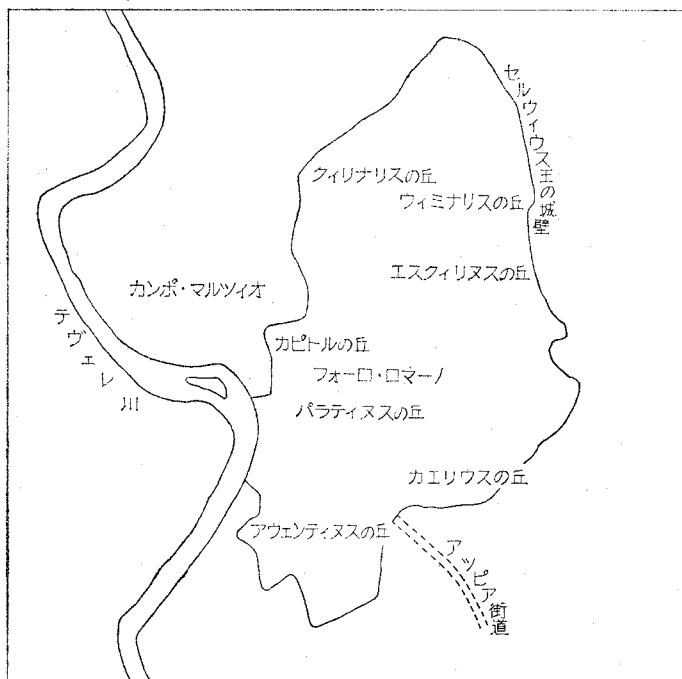
われわれ英語学徒に関係の深い二人の偉大な人物もこのテヴェレ川にかかる橋に関係している。一人はハドリアヌス帝<sup>17)</sup>である。帝もこの川に橋をかけた一人で、その橋は現在サン=アンジェロ橋 Ponte Sant'Angelo と称されるが、元はハドリアヌス帝の名を以ってアエリウス橋 Pons Ælius あるいは Pons Adrianus といわれたまことに美しい橋である。136 年の建造である。これより先 135 年に帝は自分と一族のために廟 Mausoleum of Hadrian (現在は聖天使城 Castle Sant'Angelo といわれる) を建てた (完成は帝の死後の 139 年) が、この橋はこの廟の参道かねるものである。この廟にはハドリアヌス帝、次のアントニヌス・ピウス帝 Antoninus Pius (r. 138 年～161 年)、マルクス・アウレリウス帝 Marcus Aurelius<sup>18)</sup> (r. 161 年～180 年) からカラカラ帝<sup>19)</sup>に至るローマ皇帝が埋葬されており、また城塞、牢獄として使われるなどその改変がいちぢるしい。プッチーニ<sup>20)</sup>の歌劇『トスカ』の第 3 幕の舞台はこの聖天使城の屋上で、まだ星のきらめく夜明けの空にヴァチカンの聖ピエトロ大聖堂の丸屋根が浮いている。ガヴァラドッシは看守に引かれて現われ、やがて名高いアリア『星も光りぬ』を歌う。また最後の場でトスカはこの城壁からテヴェレ川に身をおどらせてこの悲劇は終るのである。

次に今一人はハドリアヌス帝の廟と橋がその名を聖天使城、聖天使橋と変えたその次第の経緯を負うグレゴリウス教皇<sup>21)</sup>である。彼は 590 年ローマを襲ったペストの終焉を祈る行列の先頭に立ってこのアエリウス橋を渡ってい

た時に、彼はこの廟の上に一人の天使が立ち、「今や禍は終り、平和の時来たり」と告げながら剣を鞘に納めようとする幻をみた。これはペストの蔓延の終りを告げる前兆と解された。そのため今日では広く聖天使城、聖天使橋の名で呼ばれている。現在この建物の上には翼をひろげ、剣を納めようとしているブロンズの天使像が輝いている。

### 3. Capitol I. i. 68

カピトル（カピトリノ）の丘にあったジュピターの神殿のこと。ローマにはパラティヌス（またはパラティノ）Monte Palatino, カピトリウム（カンピドリオ, カピトリノ）M. Capitolino, アヴェンティヌス（アヴェンティーノ）M. Aventino, カエリウス（チェリオ）M. Celio, エスキリヌス（エス



附図 4 古代ローマ七つの丘

クィリーノ) M. Esquilin, ウィミナリス (ウィミナーレ) M. Viminale, クィリナリス (クィリナーレ) M. Quirinale という七つの丘があるが、このうちで最も小さいが、最も有名なカピトルの丘の南端にローマの守護神として崇められていたジュピターの神殿があった。これは本劇中にブルータスの言葉に出るタルクィニウス・スペルブス<sup>22)</sup>が戦勝を神に謝して献堂したものであった<sup>23)</sup>。この神殿はすでに彼等エトルリア人がギリシアの建築美を求めていることを示し、広いポルティコ portico (列柱廊) をもち、正面にはギリシア的な三角破風を飾るものであった。この神殿には神々の父であり、最高の力を神格化したジュピター Jupiter, 最高の女性を神格化したジュノー Juno, 最高の知恵を神格化したミネルヴァ Minerva の3尊を祀り、Temple of Jupiter Optimus Maximus Capitolinus, Tempio di Giove Capitolino と称されて、前509年に献堂されたもので、今日聖ピエトロ大聖堂がローマを見守るように当時のローマを見守っていた。この神殿を建設している時に、土の中から頭蓋骨が出た。これはローマがやがて世界の頭となる前兆と解され、この丘はカピトルと名付けられて最も神聖な丘とされ、神殿と共に宗教並びに政治の中心となった。それは今日までも続いてこの丘の中央の広場にはローマの市庁がある。神殿はその後、前83年、約1世紀にわたる内乱の間に破壊されたが、スラ<sup>24)</sup>が再建した。69年に再び壊れられ、また再建されたが、今日では古い神殿に通ずる石畳の道と神殿の礎が残されているだけである。それは現在のコンセルヴァトーリ美術館 Museo del Palazzo dei Conservatori の奥の一角がその場所に当り、この美術館の一部はその上に建てられた恰好になり、中に神殿の壁の一部がみられる (附図6参照)。

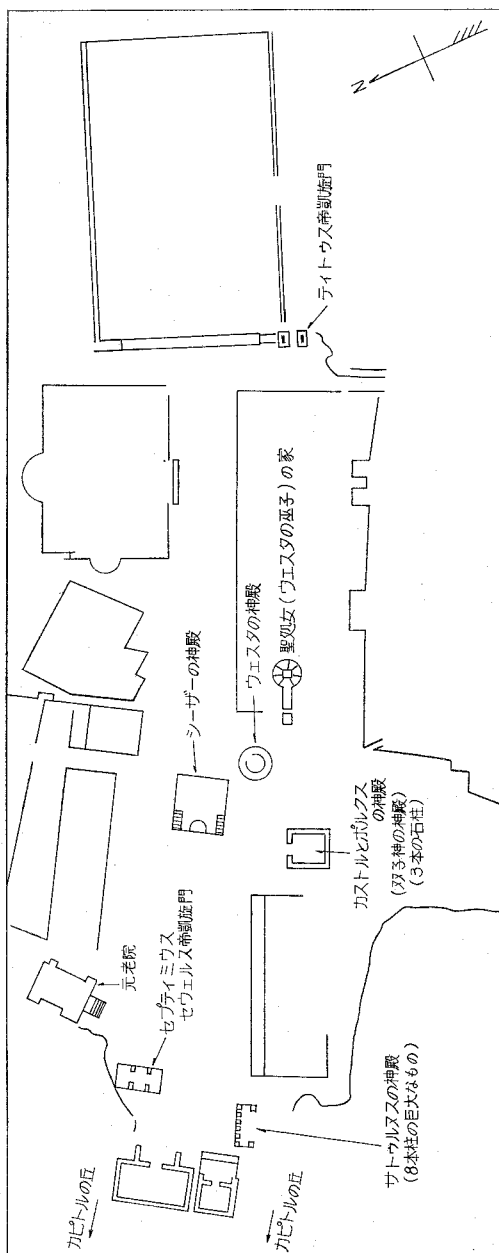
ローマ市民の生活の中心になったところがフォーラム Forum と呼ばれ、そこには政庁、議会、法廷、取引所、集会所、会堂、市場などがあった。フォーラムのうちで最大にして、また最も名高いのがフォーロ・ロマーノ Roman Forum, Foro Romano, Forum Romanum と呼ばれるもので、これはカピトルの丘とパラティヌスの丘の間の低地にあった。フォーラムには申告、訴訟、交渉、取引、買物、礼拝、演説、葬式などの用事、目的で朝から

人が群がり、かなりの雑沓を呈していた。しかし次第にいわゆる Forum proper (フォーラムの中心部) といわれる市場の性格、機能は失われて、政治と宗教の中枢となっていく。今日の遺跡から判断すると当時のフォーラムはまことに壮大華麗なものであったと思われる。

前 44 年 3 月 15 日、シェイクスピアの劇とは別に、シーザーはポンペイウス劇場 (5 項参看) のポンペイウス像の傍で 23 個所<sup>25)</sup> の剣痕をうけて斃れた。遺体はシーザーの 3 人の奴隷の手で自宅に運ばれ、3 月 20 日改めてこのフォーラムに運ばれ、アントニウスが追悼の演説を行なった。それは劇にもあるように民衆を煽動するものであった。民衆は火葬のためにフォーロ・ロマーノの演壇や裁判官席や、商店などから机や椅子、その他の木材を運び出して巨大な薪の山をつくり、狂気と火焰の中にシーザーは神となった<sup>26)</sup>。そうして彼が火葬された場所に間もなく記念柱と祭壇が設けられ、前 29 年アウグストゥス<sup>27)</sup> はウェスタの神殿<sup>28)</sup> Temple of Vesta, Tempio di Vesta の近くにシーザーを記念する神殿を建てた。これが「神なるユリウス(シーザー)の神殿」Temple of Julius Caesar であった。正面には祭壇をその中央に持つロストラ Rostra (海戦で捕獲した敵船の船嘴で飾った演壇) が設けられていた。そのため Rostra ad Divi Julii ともいわれた。このロストラはアクティウムの海戦<sup>29)</sup> で捕獲したエジプト軍船の船嘴で飾られたものであった。ロストラの両側には突き出るように階段が設けられていて、この神殿は礼拝堂として、演壇として、またシーザーを崇えるためのものとしての目的に適うもので、建物全体の均整と能率とが満たされたすぐれたものであった。

しかし、このフォーロ・ロマーノの繁栄も 330 年コンスタンティヌス大帝<sup>30)</sup> が都をビザンチウム (注 30) 参看) に移したことによって終りを告げ、「牝牛が原」Campo Vaccino と呼ばれる程に荒廃した。そうして今日無数の欠けた石像、倒れ砕けた石柱の部分が散乱している。次はアンデルセンの『即興詩人』(原作は 1835 年発表) の「露宿、わかれ」の冒頭のところであるが、その荒廃ぶりがよく伝えられている。

「月はカピトリウム (羅馬七陵の一) の背後を照せり。セプチミウス・セエル



附図 5 フォーロ・ロマーノ

ス帝の凱旋門に登る礎の上には、大外套を被りて臥したる乞児二、三人あり。古の神殿のなごりなる高き石柱は、長き影を地上に印せり。われはこの夕まで、日暮れてここに来しことなかりき。鬼気は少年の衣を襲へり。歩をうつす間、高草の座に横たはりたる大理石の柱頭に齧きて倒れ、また起き上りて帝王堡の方を仰ぎ見つ。高き石がきは、纏われたる鶯かづらのために、いよよおそろし気なり。青き空をかすめて、ところどころに立てるは、真黒におほいなるいとすぎの木なり。毀れたる柱、砕けたる石の間には、放飼の驢あり、牛ありて草を食みたり。あはれ、ここには猶我に迫り、我を窘めざる生物こそあれ。……」(森鷗外訳)

しかし、それにも拘らず一方、辺りを圧するばかりに、倒れずして残った巨大な石柱の一部や、凱旋門は当時の栄華を思うに充分である。先づ圧倒的で眼を見張るばかりのものにはサトゥルヌスの神殿 Temple of Saturn, Tempio di Saturno がある。農業の神サトゥルヌスに捧げられたものでイオニア風の柱が前面に6本、後方に2本、計8本の堂々たる姿で創建は前498年であるが、現在のものは土台が前42年、柱は4世紀のものである。次に目につく美しい柱は双子神カストルとポルクスの神殿 Temple of Castor and Pollux, Tempio di Castore e Polluce で前484年に奉獻された。15世紀頃からこの神殿は3本のコリント式の美しい円柱と土台を残すだけとなった。この近くに小さな円柱の一部が残っているのがウェスタ神殿である。またこのフォーラムには2つの凱旋門が残っている。一つはセプティミウス・セウェルス帝(注19参照)凱旋門 Arch of Septimius Severus, Arco di Settimio Severo でこれは帝が197年~202年にパルチア(10項参照)における勝利と、帝の在位10年を記念して203年に建てられた高さ23m、幅25mのものである。今一つは「人類の寵児」the delight of mankind と呼ばれたティトウス帝 Titus Flavius Sabinus Vespasianus (ca. 40年~81年)の凱旋門 Arch of Titus, Arco di Tito で、現存する凱旋門のうちの最古のもので、70年の帝のユダヤにおける戦勝を記念し、次の皇帝ドミティアヌス帝 Domitian によって81年建てられた。高さ15.4m、幅13.5mのやや小型であるが、

4 頭立ての戦車に立つ帝が浮彫にされた美しい門である。

このカピトルの丘から眼前にフォーロ・ロマーノが一望され、遠くにあの有名なコロッセウム Colosseum, Colosseo が見られ、またその右手にコンスタンティヌス大帝の凱旋門 (注 30) 参看) が瞥見される。

なお、シェイクスピアの心のなかではこの Capitol をロンドン塔 the Tower としていたらしく、; and the high east/Stand, as the Capitol, directly here. (II. i. 111) は彼が属していた劇場、すなわちロンドン橋を渡ったテムズ河の南、Bankside にある地球座 the Globe Theatre からみると、ロンドン塔が丁度真東に位置していたからである。

#### 4. Troy I. ii. 112 (附図 1 及び 7)

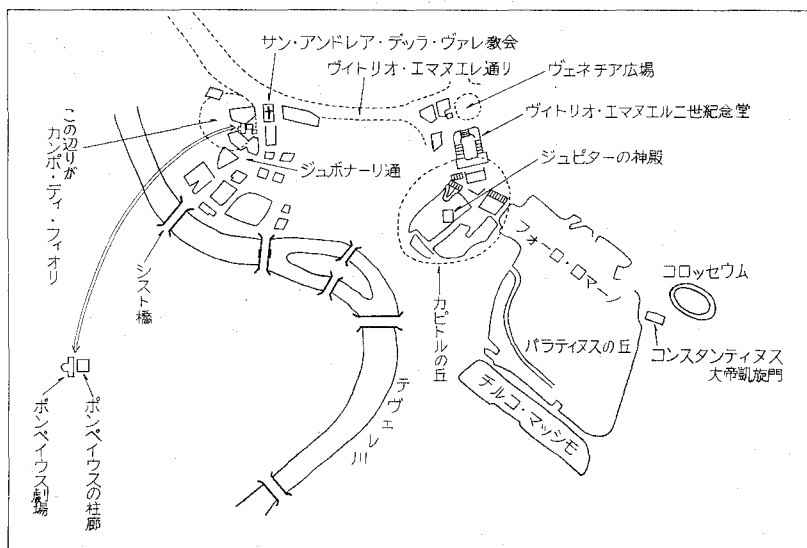
Ilium, Troia, Troja ともいわれる古代にあった小アジアの都市。現在トルコ国にある。ダーダネルス海峡 Dardanelles の南側、ヒッサリク Hissarlik の丘にある。この丘は通称トロヤの丘といわれる海拔約 37 m, 東西約 200 m, 南北約 150 m のものである。ギリシア伝説の有名な戦争、いわゆるトロヤ戦争で前 1200 年頃 (前 1250 年, 前 1182 年, 前 1136 年などの説がある) ギリシア軍隊によって 10 年間包囲され、破壊され、その物語がホメロス Homeros の『イーリアス』*Ilias* や『オデュッセイア』*Odysseia* などによって伝えられ、長い間ただ単なる伝説と思われていたが、シュリーマン Heinrich Schliemann (1822. 1. 6 ~ 1890. 12. 26) の 1871 年 10 月から凡そ 20 年の歳月をかけた本格的発掘によってトロヤの廃墟は現実のものとなって世に現われた。

#### 5. Pompey's porch I. iii. 126

#### Pompey's theatre I. iii. 152

前者は大ポンペイウス<sup>31)</sup>が Pompey's theatre に付設して増築したもので、元老院が開かれる程の大きなものであった。そもそもポンペイウスの劇場の方は前 55 年にギリシアのミュティレーネ<sup>32)</sup>にある劇場を真似て造ったもので、ローマで初めて建てられた石造の劇場であった。収容人員は 12,000 人





附図 6 ローマ市中心部 (2)

(異説 17,500 人, 17,580 人, 22,580 人。プルターク説 40,000 人) という巨大なものであった。この劇場とその付属の柱廊は昔カンポ・マルツィオ Campo Marzio, Campus Martius (附図 2, 4) と呼ばれるところに建てられた。今日、町の中心部からいえば、ヴィットリオ・エマヌエレ通り Corso Vittorio Emanuele の西南、サン・アンドレア・デッラ・ヴァレ教会 Sant'Andrea della Valle の南の辺りで、またこれを逆に川の方からいえばテヴェレ川にかかる現在のシスト橋 Ponte Sisto (昔のアグリッパ橋 Ponte Agrippa) から東に進んでジュボナリー通り Via dei Giubbonari に突き当たって、現在カンポ・ディ・フィオリ Campo dei Fiori の辺りである。またこのカンポ・ディ・フィオリの辺りは今日、有名な「ノミの市」のたつところでもあり、喧騒な野菜市場のあるところである。

## 6. Olympus III. i. 74 (附図 1 及び 7)

古代にはギリシア、小アジア地方にこの名のつく山がいくつもあったが<sup>33)</sup>、

その中で最も有名なのはギリシアのテッサリア地方 Thessaly とマケドニア地方 Macedonia の境界をなす 2,918 m の峻嶒なギリシア第一の高山である。山頂は岩肌が現われ、容姿雄風、一年の大半を雪で蔽われている。北方からの侵入に対してギリシアを守る役割をなしていた。ギリシア神話によると、この山頂は天界に達し、オリンポスの 12 の神々、すなわちゼウス Zeus を主神として以下、ヘーラー Hera、アポローン Apollon、アプロディーテ Aphrodite、ア(ー)レス Ares、ヘーパイストス Hephaistos、ヘルメース Hermes、ポセイドーン Poseidon、ディオニューソス Dionysos、アルテミス Artemis、アテーナー (アテーネー) Athena、デーメーテル Demeter、(ときにヘーラクレス Herakles、またはヘスティアー Hestia) の神殿があり、神々は集って毎日アンブロジー ambrosia (神食) とネクタル nectar (神酒) で饗宴を開き、楽神アポローンの奏でる堅琴に和するムウサイ (ミューズ) の女神たちの歌をききながら太陽が沈むまでいろいろと相談事を行なったといわれる。

7. **Sardis** IV. ii. 28 38.29N 28.05E (附図 1 及び 7)

Sardes と綴る。古代小アジアにあったリディア Lydia 王国の首都で、Sadis の古名である Hyde は『イーリアス』のなかで (第 20 巻) この辺りに住むマイオニアの族長 Maeonian chiefs の町につけられたものであった。現在トルコのイズミル Izmir (Smyrna) から約 72 km 東の地点にあり、Boz Dag 山 (2,157 m) の北麓である。前 750 年頃から土着民のリディア人が興ってこの町を中心に発展した。彼等はエーゲ海沿岸に発展しつつあったギリシア人の植民地を支配して、東西貿易に繁栄をつづけたが、前 546 年ペルシア王によって滅ぼされるなど前 7 世紀、前 6 世紀、前 4 世紀、前 3 世紀と数度にわたり異国の軍隊の占領するところとなったり、また 17 年に起きた大地震のために被害を受けたりしてきたが、330 年のコンスタンティヌス大帝のコンスタンティノーブル遷都まではエーゲ海と内陸とを結ぶ主要な道路にあることと、地味豊かな広大な土地をかかえて、商業、産業の中心であって大いに繁栄をつづけていた<sup>34)</sup>。その後衰微の一途をたどり、1402 年ティームール<sup>35)</sup>



附図 7 ギリシア

によって荒されてから歴史上から消えた。

ブルータス (ブルートウス), キャシアス (カツシウス) の二人がアントウニアス (アントニウス) 側とフィリッパイ (フィリッピ) で戦うまでに彼等二人は個々に小アジアを中心に各地を転じて軍隊を集めていた。それについては *Plutarch's Lives* (Brutus, XXVIII-XXXVIII) に詳しい。

## 8. Philippi IV. iii. 169 (附図1及び7)

ギリシアのマケドニア地方サロニカ市 Salonika の北東約 120 km, カバラ市 Kavalla の北西約 16 km にある現在のドラマ市 Drama がこれに当る。初めはクレニデス Crenides と呼ばれ、これは「泉のある地」の意味であった。武力と財力と外交のうまさでマケドニアを一大強国としたフィリッポス二世 Philippus (前 382 年～336 年) に征服された。王はこの地に前 358 年～357 年に新しい町をつくった。Philippi の町の名はこの王の名に由来している。王がここに目をつけたのはこの地がガンギテス川 Gangites (現在のアンギテス Angitis) の低地を俯瞰する峻わしい丘上という天然の要塞の他に、この近郊から出る金と銀とにあった。本劇の合戦はブルータス側が 8,000 の軍隊を、アントウニアス側はその 2 倍の軍隊を失った。

聖パウロは第 2 次伝道旅行 (年代不詳。48 年～49 年頃) でこの地で初めて——ヨーロッパで初めて福音を説き、そしてその種子を播いたのであった。すなわちこの地でヨーロッパ最初のキリスト教信者が生まれたのであった。その婦人の名はルデヤ Lydia とされている。53 年頃パウロは第 3 次の伝道旅行を行なった際、この地にヨーロッパ最初の教会を建て、また 10 年後パウロはローマでの幽閉の身からこの地の信者に書簡を書き送っているのである。それが『愛の書簡』、『歓喜の書簡』ともいわれるピリピ書である。

## 9. Hybla V. i. 33 (附図1)

イタリア半島の南西端、シチリア島 Sicily (シシリー島) にあって、Hybla Magna, Hybla Major とも称される古代の町で、エトナ山<sup>36)</sup>の南丘陵地帯にあって、現在のパテルノ Paterno (37. 34 N 14. 55 E) の辺りと推定される。この一帯に生える thyme (タイム。淡紅色の花をつけ、葉は香味料に用う) や、この香気ある花に群る蜂とその蜜の香りで有名である。なお、シチリア島はローマが前 241 年初めて手に入れた海外征服地である。

## 10. Parthia V. iii. 37 (附図 1)

古代イラン Iran の王国。カスピ海 Caspian Sea の南東、現在のイラン高原北東の地にイラン系遊牧民がシリア王国 Syria (別名セリューカス王国 Seleucid) から独立して建てた国で、中国の史料に「安息」とあるのはこの国の王朝名アルサケス Arsaces を写したもの。前 7 世紀頃からたえずペルシア帝国やマケドニア帝国やシリア王国 (セリューカス王国) に支配されていたが、前 250 年始祖アルサケスがシリアのセレウコス 2 世 Seleucus II に反抗し、パルチア王国を建てた<sup>37)</sup>。このためパルチア王国は別名アルサク王国 Arsacids ともいわれる。前 2 世紀中葉には西はユーフラテス川 Euphrates River から東は中央アジアのアムダリア川 Amu Darya, 北はカスピ海, 南はインド洋 Indian Ocean に及ぶ大国家となった。前 1 世紀頃からシリアにかわったローマ帝国と争い、ある時期は盟邦となり、ある時期はその属領となりながらもシルク・ロードの西部を占めて栄えたが、226 年ペルシアに国を奪われた。

彼等の calvalry (騎兵) は有名で今日その戦法から Parthian arrow (shot, shaft) とか Parthian glance の言葉を生じている。

## 11. Thasos V. iii. 104 (附図 1 及び 7)

F 版では Tharsus, North 版は Thassos。北エーゲ海にあるマケドニアの島。エーゲ海域第一の金山があり、また対岸トラキア Thraki の金山も有する財政豊かなポリスであったため前 708 年から人が住み、前 492 年にはペルシアに、前 465 年頃にアテネに、その後マケドニアにも支配されたが、前 196 年頃ローマの支配となった。1462 年トルコに領有され、1841 年から 1908 年までエジプトの支配するところとなったが、1913 年ギリシアに復した。町の大半は古代の姿を残し、当時の城壁が保存されている。

劇中、ブルータスがキヤニアスの遺骸をこのタソス島に送ったことはブルータークに拠ったものである (邦訳、第 11 分冊 277 頁)。

(昭 47. 5. 20 受理)

## 注

- 1) Vatican City State, Città del Vaticano. 1929年2月11日ラテラン条約がイタリア政府と教皇庁との間に成立し、教皇を国家元首とするヴァティカン市国が生まれた。古代ローマ時代はこの辺ヴァティカンの丘付近は皇帝ネロ Nero (Full name は Nero Claudius Caesar Drusus Germanicus ; Original name は Lucius Domitius Ahenobarbus. 37年12月15日生, 68年6月9日自殺。r. 54年~68年) の競技場であり、キリスト教徒虐殺の地でもあった。しかも使徒ペテロ Peter (Cephas, Simon Peter. Petrus (羅)). 12使徒の一人。ネロの治下で殉教したといわれ、1950年、時の教皇ピオ12世 Pope Pius XII は聖ピエトロ教会の地下に聖ペテロの霊廟があったことを発表した) が殉教した土地としてキリスト教徒の尊崇する地となり、コンスタンティヌス大帝が324年頃(異説319年)ペテロの墓の上に教会を建てたのが今日この市国にある世界のカトリック教会の最大にして、最も尊厳な聖ピエトロ大聖堂 St. Peter's (Basilica di San Pietro in Vaticano) の基であるとされる。
- 2) ローマ建設の日については異説が多い。前754年, 前752年, 前722年ともいわれる。なおプルターク(邦訳, 第1分冊69頁~70頁) 参看。
- 3) 河野与一訳『プルターク英雄伝』ではアムーリウスが兄、ヌミトルが弟となっている。岩波文庫, 第1分冊63頁。
- 4) Ilia, Rea Silvia, Rhea Silvia.
- 5) Vestal virgin となったこのレアがある日、テヴェレ川の岸で昼寝をしていた時、軍神マルスが彼女を見染め恋を感じて彼女と交った。そうしてレアはロームルスとレムスという双生児を産んだ、と伝えられる。
- 6) パラティノの丘は昔3つの小高い部分があつて、それぞれの名前をもっていた。東北部がウェリア Velia でフォーロ・ロマーノに通ずる。東南部が狭義のパラティウム Palatium と呼ばれ、チルコ・マッシモ(注22)参看)を見降ろす位置にある。西北部がこのケルマロスでカピトルの丘、すなわちジュピターの神殿(3項参看)に向っている。別綴 Germalus。また注8)を看よ。
- 7) Plutarch's Lives, Romulus, III, 2~IV, 2 (『プルターク英雄伝』邦訳, 第1分冊59頁~60頁)。
- 8) 「ローマ」の名の起源については『プルターク英雄伝』(ロームルスの1章及び2章)にも詳しく、また3章にも暗示的と思われる記述がある(邦訳56頁~58頁, 及び60頁)が、更に上記注6)のケルマロス(ゲルマルス)と狭義のパラティウムが丁度乳房(ruma)の形をしていたことに由るという説もある。
- 9) 本劇 I. i. 72 と III. ii. 103 に出る Lupercal は2月15日に行なわれるローマ城壁清めの祭りで、山羊と犬が生贄とされる。この日貴族の出の若者二人が裸になって神官の前に進み出て身を清められたのち、生贄の山羊の皮を取って身を皷い、その一部を皮紐とする。この皮紐をもって町を走り、路行く人を打つが、特に婦人はそれに打たれ

ると懐妊に通ずると信ぜられていた。このルーパキヤルのある場所はロームルスとレムスが狼に育てられたところであったとされる(附図3参考)。

- 10) ブルタークでは *σὺφορβής*=swineherd すなわち豚飼となっている (Romulus, VI. 1)。
- 11) 注6)及び8)に同じ。
- 12) ブルターク。邦訳, 第1分冊 61頁~62頁。
- 13) ブルターク。邦訳, 第1分冊 66頁~68頁。
- 14) 異説がある。イ) 突然大雷雨が起こり。ロ) 嵐の中に。ハ) 火車で天上に。そうしてこれらは王が貴族たちに暗殺されたことの作り話ともされている。
- 15) Quirinus。ジュピター, マルスと共にローマの国家の三柱の主神を形成する神。古代の伝承によればこの名はサビーニー Sabini 人のクレース Cures に由来するらしく, さらにローマの最古の住民は《ローマ人とクウィリーテース》populus Romanus Quiritesqueと呼ばれている点から, この神はおそらくクウィリーナーリス Quirinalis 丘にいたサビーニー人とローマ人とが合併して, ローマ市を構成したおりに, ローマの三神中に加えられたものと思われる。彼は他の二神と同じく独自の神官を有し, その祭クウィリーナーリア Quirinalia は2月17日であったが, 彼の祭式についてはなにごとも伝わらない。彼はロームルスと同一視され, その後ホーラ Hora もロームルスの妻ヘルシリア Hersilia と同じであるとされている。(高津『ギリシア・ローマ神話辞典』)
- 16) 最長の川はポー川 Po (Padus, Eridanus) で全長約 650 km。北イタリアを流れてアドリア海 Adriatic Sea に注ぐ。
- 17) Hadrian。またの名 Adrian。Full Latin name では Publius Aelius Hadrianus (76. 1. 24~138. 7. 10)。117年から138年までのローマ皇帝。スペインのイタリア Italica の出身。平和政策をとり, 内治に力を注ぐ。法学者を重用し, 文芸美術を奨励した幅広い精神的な人物であった。五賢帝の一人。120年からスコットランドにイギリス版の万里の長城を築いた。これがいわゆる「ハドリアヌスの長城」Hadrian's Wall である。ハドリアヌス帝がブリタニアを訪れたのは121年か122年だとされていて, 完成は123年(工事の困難さからみてこれは余りに早すぎる)とも126年とも127年ともいわれている。この辺境防衛の長城はタイン河とソルウェー河の線 Tyne-Solway Line に設けられた全長約 118 km, 高さ 5 m, 幅 2.5 m の石材と粘土で築かれたものであった。
- 18) アントニヌス・ピウス帝とマルクス・アウレリウス帝はハドリアヌス帝とその二人の前帝ネルウァ帝 Marcus Cocceius Nerva (ca. 30年~98. 1. 27. r. 96年~98年) 及びトラヤヌス帝 Marcus Ulpius Trajanus (ca. 53年~117年. r. 98年~117年) と共に五賢帝と称される。「ネルウァ帝, トラヤヌス帝, 及びハドリアヌス帝が帝国にもたらした平和と繁栄の時代は, 二世紀のアントニヌス・ピウス帝, 及びマルクス・アウレリウス帝の時代もつづいた」(ウォールバンク, 邦訳 14頁~15頁)「エドワード・ギボ

ンはその著『ローマ帝国衰亡史』をアントニヌス朝の時代から説きおこしているが、彼は「五賢帝」の時代におけるほどヨーロッパの住民が幸福だった時代はないと信じていた」(ウォールバンク, 邦訳 31 頁)。なお、アントニヌス・ピウス帝はスコットランド辺境防衛線を北進させた。それは 140 年から 143 年頃までにブリタニア駐在のローマ知事ウルビクス Q. Lollius Urbicus がフォース河とクライド河の地狭 Forth-Clyde Isthmus に遠征を行ない、ハドリアヌスの長城に倣ってこの線に第二の長城を築いた。そうしてそれは時の皇帝アントニヌス・ピウス帝に因んで「アントニヌスの長城」Antonine Wall と呼ばれる。この長城はハドリアヌスの長城に比べて長さも短く(約 60 km)、また強度も貧弱なものであった。

- 19) カラカラ帝 (188 年~217. 4. 6)。本名は Marcus Aurelius Antoninus。前名は Bassianus。フランスの現在リヨン Lyon (Lyons) で生まれ、この地方の帽子のついた長上衣を彼が愛用したことからカラカラ Caracalla, Caracallus 帝と呼ばれた。弟を殺して独裁権力を固め、貨幣の悪鋳を行なったり、有名なカラカラ浴場 Terme di Caracalla を営んで淫逸に耽けるなど名帝ではなかった。カラカラ浴場とは実は古代ローマに数多くつくられた大浴場の一つなのであるが、その壮大さと華麗さで最も有名となっている。間口 220 m、奥行 114 m の煉瓦造りで、206 年セプティミウス・セウェルス帝 Lucius Septimius Severus (146 年~211 年。r. 193 年~211 年。ブリタニアに赴いてハドリアヌスの長城を修復し、しばしばスコットランド進出を企てカレドニアに親征したが成功せず、エブラカム Eburacum, Eboracum; 現在のヨーク Yoke で 211 年 2 月 14 日病死した) が着手し、216 年カラカラ帝の時に完成した。現在この廃墟はその規模が利用され夏の夜の野外オペラの上演の場となっている。
- 20) Giacomo Puccini (1858. 12. 22~1924. 11. 29)。イタリアの歌劇作曲家で『トスカ』の他に『ラ・ボエーム』、『蝶々夫人』等の成功作で名を成した。
- 21) Gregorius 一世。聖人、教皇。(ca. 540 年~604. 3. 13)。ローマ貴族の出で、572 年ローマ市長となったが、のちベネディクト会修士となった。590 年修道士出身初の教皇となった。次回「ヘンリー八世地誌考」に詳述するが、教皇は 597 年アウグスティヌスと 40 人の修道士を英国に送り、カンタベリを中心に布教を試み、輝かしい成果をあげた。また教皇は教会の聖歌を改修し、グレゴリオ聖歌と呼ばれているものがこれである。
- 22) Lucius Tarquinius Superbus (前 534 年~510 年)。ローマ史は王政時代(前 510 年まで)、共和政時代(前 30 年または前 27 年まで)と帝政時代(それ以後)の 3 時代に区分されるが、王政時代のことは不詳であるが、このタルクィニウス・スベルブスは古代ローマの伝説では王政時代の第 7 代、つまり最後の王で、ローマはこの王——タルクィニウス家を追放することによってその自由を得たといわれる。このスベルブスは古代ローマの伝説的国王第 5 代タルクィニウス・プリスクス Lucius Tarquinius Priscus (前 616 年~578 年) の息子である。父のタルクィニウスはエトルリア Etruria (アルノ



川とテヴェレ川に囲まれ、中央イタリアの西岸約 320 km にわたって広がっていた古代国家の名。現トスカナ地方)のタルクィニイ Tarquiniî に移住してきたギリシアの出で、ローマにきて第4代国王、すなわち自分の前代王アングス・マルキウス Ancus Marcius (前 640 年~616 年)の息子たちの守役となって (一説にはアングス・マルキウスの知遇を得て)、彼の死後その息子たちを斥けて (一説には賢明な行ないによって) 王位に即いた。彼は今でもテヴェレ川に大きな排水渠の吐け口を見ることのできるクロアカ・マキシマ Cloaca Maxima という下水道の建設 (完成は前 510 年スベルプスの手になる) をなしたといわれる。これは低地のフォーロ・ロマーノにたまる水を排除しようとしたものである。またパラティヌスの丘の南、アウェンティヌスの丘との間にあって、長さ 500 m、約 30 万人の観客席を有したといわれる野外競技場、いわゆるチルコ・マッシモ Circus Maximus, Circo Massimo を建てたといわれる。このように都市や諸般の制度を整備したが、彼が王位を自分の奴隷の子セルウィウス・トゥリウス Servius Tullius (前 578 年~534 年) に譲ろうとしているのを知った旧主マルキウスの息子たちによって討たれた。しかし王位は結局トゥリウスが継いで第6代国王となった。彼はタルクィニウス家の女奴隷の子として生まれたが (父親は不明)、主人の娘と結婚して王位に登ったといわれる。国制の創設者といわれ、いわゆる「ツルリウスの改革」を行なった。それは富の所有に応じて市民をクラスス classis に分け、更に各クラスス所属のケントウリア centuria に配属する、というものであった。また 12 の城門を備えてローマ市を巡る城壁——セルウィウスの城壁 Servian Wall として知られた城壁の建造者でもあった (しかし、最近の考古学の発達はこの城壁がもっと後の前 378 年頃の建造としている)。一方彼は旧主人の子、すなわち本注のスベルプスに対しては自分の娘トゥリア Tullia を与えて懐柔していたが、このトゥリアの妹で同じ名前の娘は自分の夫であり、しかもスベルプスの弟であるアルン Aruns が、英雄的資質に富む兄とちがってその性質優柔不断であることを不満として、陰謀をめぐらして夫を殺し、一方スベルプスにもその妻を殺させて、公然と義兄の妻となり、しかも更にスベルプスに自分の父であるセルウィウス・トゥリウスまで殺させた。その時、夫を今や王として迎えた路上に残る父の死体に無礼を働いたため、その通りは以後 Vicus Sceleratus=Abominable Street と称された。

スベルプスが王位を手に入れた方法はマキアヴェリのいう如くまことに「常規を逸した醜怪なもの」(『ローマ史論』邦訳、第3巻、31頁)であったが、武勇にすぐれ、ローマの版図を広げた。しかし一方彼は今までの国法を無視し、元老院の権力を弱める方策を講じ、専制政治を布き暴政 (注23) 参看) を行ない、圧制的暴君の代表といわれる。彼はこれがためと、次に述べる息子の不品行のために追放されたと伝えられている。すなわち、王の一人息子のセクストゥス Sextus は従兄のタルクィニウス・コラティヌス Lucius Tarquinius Collatinus の美しい妻ルクレティア Lucretia に懸想して脅迫の上、これを辱めた。夫はこのことを知ったが、罪を犯す意思のなかった

こと故、たとえその身が潰されても罪でないと慰めたが、ルクレティアは厳しい良心の呵責からたとえ脅迫されてのこととはいえ、罪であることに変わりはない。そのような考え方に従えば思わしい前例を残すことになる。自分の罪に対する罰はこの通りと言って、自ら短刃を心臓に突き立てて果てた。ルクレティアの屍を前にして、その父や夫その他の身内の者たちが為すことなく、ただ立ち騒ぐところにタルクティウス一家に対する反乱が起こった。その先頭に立ったのが本劇マーカス・ブルータスの祖先であって、‘old Brutus’ (I. iii. 145), ‘My ancestors’ (II. i. 53) として出るイウニウス・ブルートゥス *Lunius Junius Brutus* (fl. 6 B.C. の歴史的人物と推定される) である。彼はその場に駆け込み、その傷口から短刃を引き抜いて今後は断じてローマに国王などを生かしておかぬと誓って、タルクティウス一家を追放し、共和制を樹立し、初代執政官となった。

- 23) スペルブスが追放された理由は上記注 22) に述べたものの他に、この神殿の建立もその一つの因となった。ローマの史家リウィウス *Titus Livius* (英語では *Titus Livy* と記される。前 59 年～後 17 年。40 余年を費して『ローマ史』*Ab Urbe Condita Libri*, 142 巻という大著作を著わした) によると、王はこの神殿の建立に熱中して人民を疲弊させた。またクロアカ・マキシマの工事も同じであった、という (マキアヴェリ『ローマ史論』邦訳、第 3 巻、31 頁～32 頁)。マキアヴェリは、王は人民をこき使った、と述べている (マキアヴェリ、同書、31 頁)。
- 24) *Lucius Cornelius Sulla* (ca. 前 138 年～78 年)。ローマの貴族で高等教育を受け、ギリシア文学を愛好したが、放蕩者でもあった。軍人、政治家として活躍。はじめ民衆派の執政官マリウス *Gaius* (あるいは *Caius*) *Marius* (前 155 年～86 年。ローマの軍人。平民の出であって、従来の市民兵制度を捨てて、貧民を集めた軍隊を組織した。軍事的才能はあったが、教養に乏しく、残忍且つ事に当たって拙劣であったといわれる。前 107, 103, 102, 101, 100 年に執政官となった。更に前 87 年閥族派のスラ派の大虐殺をローマで行ない、前 86 年 7 度目の執政官となったが、在任わずか 17 日、スラを恐れながら病死した) の部下であったが、のち彼から離れ、やがては対立するようになった。前 88 年スラは執政官となり、この頃 2 人の抗争が激化した。間もなくスラはマリウスを追放したが、この時スラはローマの軍隊をローマに攻め込ませた。これはローマ人がローマを攻めた最初の事件であった。スラは前 82 年マリウス死後のマリウス派に対し「最初は一人ずつ別々に裁判して罰したが、後には暇がなくなったので、12,000 人もいたすべての人々を 1 カ所に集め、前に自分を泊めた人だけに助命を赦し、すべてを殺すように命じた」(『プルターク英雄伝』邦訳、第 6 巻、203 頁) など不法な大虐殺を敢行し、旧来とは異なり任期、権限に何の制限もない終身の独宰官となった。前 79 年突然職を辞し、ポッウーリ *Pozzuoli* (プテオリ *Puteoli* ともいう。ナポリ *Napoli* の西方約 11 km にある保養地) の付近の田舎に退いたが、翌年歿した。マリウスの甥であったジュリアス・シーザーがスラに迫害され、命を狙われた

のはこの頃であった。

- 25) リヨン大学のミシェル・ランボー Michel Rambaud 教授は 35 箇所と記している。cf. M. Rambaud, *César*, 邦訳, 寺沢精哲訳, 文庫クセジュ, 148 頁。
- 26) 前 42 年の元旦, 元老院はシーザーの神格化を決議した。
- 27) 前名 Gaius Octavius。前 63. 9. 23～後 14. 8. 19。母はシーザーの妹ユリア Julia の娘アティア Attia であった。父の死後, シーザーの保護を受けたが, シーザーが暗殺された後, その遺言で, シーザーの養子かつ後継人に指名されていることを知り, 前 44 年春, ギリシアのエピロス Epirus (Epeiros, Ipiros。現在のエピロス地方) から急遽ローマに帰り, ガイウス・ユリウス・カエサル・オクタウィアヌス Caius Julius Caesar Octavianus と改名した。アントニウスにレビドゥスをも加えて 3 人で第 2 次三頭政治を組織した (前 43 年)。アントニウスと共にフィリッピの戦いでブルートゥスとカッススたちを敗死させた (前 42 年)。その後海上権を支配していた大ポンペイウス (注 31) 参看) の息子セクトゥス・ポンペイウス Sextus Pompeius を撃破し (前 36 年), レビドゥスも失脚した後はイタリア半島及び西ヨーロッパの実力者となり, 東ヨーロッパを支配するアントニウスと対立するようになった。アントニウスがエジプトでクレオパトラに耽溺し, 妻でオクタウィアヌスの姉オクタウィア Octavia を離婚したことにより (前 32 年) 二人の対立は今や決定的となり, 遂に前 31 年 9 月 2 日アクティウムの海戦で勝利を収めローマに凱旋した。「以後ローマ帝国はほぼ 2 世紀半にわたって「ローマの平和」がもたらすあらゆる福祉を享受した」(ウォールバンク, 邦訳, 33 頁)。彼は前 27 年アウグストゥス Augustus すなわち尊厳者の尊称を元老院によって与えられた。彼は「紀元前 30 年にローマ国家の首長となると, まもなく神格化の効用に気がついた。冷徹な政治家でかつ將軍であったシーザーは, 当時すでに故人であったが, 「神なるユリウス (シーザー)」と呼ばれていた。その後のローマ皇帝は, 支配階級からとくべつ嫌われていた者は別として, すべて死後に——あるいは生前にすら——神格化されるのが普通となった。また, アウグストゥス帝は支配体制強化の一方策として, ジュピター, ウェスタ, ヴィーナス, アポロその他の伝統的な古い神々の祭祀にも改めて力を注ぐ周到さを示し, また, 使われなくなった神殿, 荒廃した神殿の広汎な復興にも着手した。帝は紀元前 12 年に大神官 (pontifex maximus) に就任したとき, この地位に, 歴史的にも意義の深い新しい生命を与えた。すなわち, 「その瞬間にはじめてヨーロッパにおいて王座 (皇帝権) と祭壇 (宗教的首長権) との結びつきが生じた」のである」(ウォールバンク, 邦訳, 162 頁～163 頁)。実際帝は「その自叙伝の中に, 自分は 82 個の昔の神殿を修復するつもりだと書いている。彼が新しく建てた建物としては, 数個の神殿, フォロ, 柱廊, アーチ, 霊廟, 平和の祭壇, 公園, 公衆浴場, 劇場, 大図書館, 市場, 穀物倉庫, 船渠など枚挙にいとまがないくらい多い」(『沈黙の世界史』220 頁)。また帝は内政に大いに力を注ぎ, 文芸にも深い理解を示してラテン文学の黄金時代をつくった。

- 28) <sup>カマド</sup>元来竈の女神であったが、ローマではジュピター神と共に精神的支柱となった。神殿はフォーロ・ロマーノの中央部に円形の姿で建立され、女神には神像がなくここに燃える火が崇拝の対象とされ、ローマの永遠性を象徴する聖火とみなされ、ここに仕える祭女は聖処女 Vestal virgin, Vestale と呼ばれ、終生処女を通し、この聖火を絶やすことなく守ることがその掟、務めとされていた。今日フォーロ・ロマーノにこのウェスタの神殿の一部が倒れずして残り、またそれに仕えた聖処女たちの像が神殿の近くにあった聖処女の家の前に不完全な姿ではあるが立っている。
- 29) 前31年9月2日アントニウス（アントウニウス）とクレオパトラの連合軍をオクタウィアヌスが敗った海戦はギリシアのアクティウム Actium で、連合軍は500隻の軍船と70,000の兵士、一方オクタウィアヌスは400の軍船と80,000の兵士で行なわれた。アクティウムは現在のギリシアの北西海岸、イオニア海 Ionian Sea の入り込んだアンブラキア湾 Ambracian Gulf の入り口の岬である。なお、注27)及び附図7参照。
- 30) Constantine I (ca. 274年～337.5.22. r. 306年～337年)。Full Latin名は Flavius Valerius Aurelius Constantinus。コンスタンティヌス大帝 Constantine the Great と呼ばれる。「ミラノの勅令」を出してキリスト教を公認する他、文武官の分離を行ない、幣制の改革などを行ないローマ帝国の再建を図った。帝は2人の正帝 Augusti と2人の副帝 Caesares による四分治制をやめ、324年専制君主制を確立し、ローマ帝国はドミナトゥス Dominatus (専制君主制政期)に入った。330年異教的伝統の強いローマから都をビザンチウムに移し、コンスタンチノポリス (コンスタンティノープル) Constantinopolis (Constantinople, 現在のイスタンブール Istanbul で1930年まではコンスタンティノープルと呼ばれていた)と改名してキリスト教的首都を建設し、国家統一の基礎をキリスト教においた。しかし彼自身は337年死に至る臨終の床で、はじめて洗礼を受けた。

帝は306年ブリタニアのエブラクム（現在のヨーク）で亡くなったコンスタンティヌス一世（通称 Constantius Chlorus, Chlorus=the Pale. Full name は Flavius Valerius Constantius. ca. 250年～306.7.25）の第一子で、父の亡き後副帝の地位を継ぎ、ブリタニアの道路整備の大計画を立てたが、305年四分治制による四帝の一人ディオクレティアヌス（正）帝 Diocletian (Full Latin 名 Gaius (or Caius) Aurelius Valerius Diocletianus. 245年～313年。r. 284年～305年) が退位すると内乱が起きて四分治制が壊れはじめた。コンスタンティヌスはこの時権力争いに乗り出して大陸に出征し、競争者を破って324年唯一の皇帝となったが、特に最強敵のマクセンティウス Marcus Aurelius Valerius Maxentius に打ち勝って勝利を占めたことに関わる劇的な伝承は有名である。戦に先立って彼は空中に光る十字架と「これにて勝て」*In hoc signo vinces* (=in this sign thou shalt be victorious; under this sign be victorious. ある本ではギリシア語を以って伝えている。ἐν τοῦτοῦ νίκᾳ) という文字を見たと言われている。312年10月28日、テヴェレ川にかかるミルヴィオ橋の

近くであった。これより彼は 衆の印を軍旗として用いた。これは Jesus Christ のギリシア語 (*Χριστός*) のイニシャルズである。またこの戦勝を記念して建てられたコンスタンティヌス大帝の凱旋門 Arch of Constantine, Arco di Costantino はコロッセウムとパラティノの丘の間にあって、高さ 21 m、幅 25.7 m であり、その浮彫の一つはミルヴィオ橋付近で累々と折り重なって斃れるマクセンティウスの兵士と勝てるコンスタンティヌスの兵士の戦闘の光景を描いている。輝かしいコンスタンティヌスの勝利に比べ、マクセンティウスの敗れ方は一入衰れである。彼は不面目なことにも戦場から逃亡、テヴェレ川に落ち、武具の重みで溺死したのであった。

- 31) Pompey (前 106.9.29~48.9.28)。Pompey the Great. Full Latin 名は Gnaeus Pompeius Magnus。共和政末期の政治家、将軍。前 60 年シーザー及びローマの大富豪クラッス Marcus Licinius Crassus と第 1 次三頭政治を起こしたが、妻ユリア Julia (シーザーの娘) の死とクラッスの戦死で、シーザーと対立して敗れ (前 48 年) エジプトに逃れ、昔の部下に刺されて死んだ。大ポンペイウスと通常呼ばれる。
- 32) Mitylene, Mytilene, Mytilini と綴られる。古名 Kastro。レスボス島 Lesbos の東海岸にあって、エーゲ海を距ててトルコに近い。ポンペイウスは前 65 年ローマにとり宿年の敵であるミトリダテス大王を敗った。この戦役の際このレスボス島の劇場を親しく見てきたものであった。なお通常ミトリダテス大王 Mithridates the Great といわれるポントス Pontus の王 Mithridates (Mithradates) VI すなわち Mithridates VI Eupator (ca. 前 132 年~前 63 年) は前 88 年から前 64 年の間に第 1 次、第 2 次、第 3 次といゆるミトリダテス戦争を起こし、ローマに対抗し、ローマにとっては最大の、最も恐るべき王であったが、最後はポンペイウスに敗れてクリミア Crimea に逃げ自殺した。
- 33) Olympus の名のつく山はこの他ギリシアのペロポネソス半島 Peloponnisos に多く、ここのアルカディア Arcadia、ラコニア Laconia、イリア Iliia (エリス Elis) のオリンピア Olympia の東などと、かつての小アジアのリディア、リシア Lycia、ガラティア Galatia などの地にあって、しかも全部で 14 あったといわれるが、現在もそれが判然とするのはキプロス Cyprus 島にあるものぐらいである。
- 34) 貨幣として一定の形、品位、量目が定められ、刻印を付してつくられた最初の貨幣は、前 700 年頃このリディアで鋳造されたエレクトロン貨幣とされる。
- 35) いくつかの呼び名がある。Tamerlane, Timur-Leng (これは彼が跛者であったことによる), Tamburlaine, Timur, Timour, Timur Bey。帖木児と漢字が当てられる。1336.4.8~1405.2.18 (17)。モンゴール出身の回教徒で、1370 年即位してからイスラム教伝道の名を以て 30 回に及ぶ出征を行ないトルコ、シベリア、インドを征服、大帝國を築き上げた。マロー Marlowe、ロウ Nicholas Rowe、ポー Poe などがこの英雄を題材にした作品を残している。
- 36) Etna。イタリア語で Monte Etna。シシリー語で Mongibello。ラテン語で Aetna

といわれる。ヨーロッパ最高の火山である。なだらかな円錐形で最高点は 3,263 m。第 3 紀の初期から活動を続ける活火山で、その火口は東西 800 m、南北 500 m もあり、山腹には 250 以上の寄生火山があり、史上 80 回以上の噴火が記録され、辺りの町に多大の被害を与え、その主たるものは 1169, 1669, 1693, 1755, 1792, 1832, 1852, 1865, 1879, 1886, 1892 であり、最近のは 1950 年であった。この山はギリシア神話にも扱われ、「エトナ山は内も外も火となり」「彼等は終に征服されて、エトナの山の下に生埋めにされました。この山の下で彼等は今でも時によると自由の身になりたいと藻掻き、地震を起こしてその島(シチリア島)を震わすことがあります。この巨神たちの息はエトナ山を突き抜けて立ちのぼります。人々はそれを見て火山が噴火すると言っています」(バルフィンチ)。

この島の貴族に生まれ、ニーチェ Friedrich Wilhelm Nietzsche のしばしばふれる古代ギリシアの哲学者エンペドクレス Empedokles (ca. 前 493 年~ca. 433 年) がこの山に身を投じて死んだという伝説はミルトン Milton の *Paradise Lost*, メレダスの *Empedocles*, マーシュ・アーノルド Matthew Arnold の劇詩 *Empedocles on Etna* などに取扱われている。

- 37) パルチア王国を建てたのは始祖アルサケスではなくて、彼の後を間もなく継いだ弟のティリダテス一世(?)であるという説もある。

後記 この稿を草するに当たってはその性質上多くの辞典、歴史書、地図、シェイクスピア劇のテキスト、現地で直接見聞したことゝの記録、現地で入手したパンフレットの類を参照したが、煩雑をさけて概説的なものは省き、その主たるものととどめる。

Encyclopaedia Britannica

Everyman's Encyclopaedia

The American Peoples Encyclopedia

Webster's Geographical Dictionary

Webster's New International Dictionary

The New Century Cyclopedia of Names

Rome and Central Italy, Ernest Benn LTD

F. G. Stokes: A Dictionary of the Characters and Proper Names in the Works of Shakespeare, New York, 1970

A. E. Baker: A Shakespeare Commentary, New York, 1964

Plutarch's Lives, The Loeb Classical Library

G. B. Harrison, Introducing Shakespeare, Pelican Books, 1939

岩波西洋人名辞典

聖書大辞典 新教出版社

高津春繁『ギリシア・ローマ神話辞典』 岩波書店

世界美術大系『ローマ美術』 講談社

- 世界の文化史蹟『ローマとポンペイ』 講談社  
 プルターク英雄伝，河野与一訳，岩波文庫  
 バルフィンチ作，野上弥生子訳『ギリシア・ローマ神話』 岩波文庫  
 モーリッツ著，藤田五郎訳『ギリシア・ローマ神話』 みすず書房  
 ギボン著，村山勇三訳『ローマ帝国衰亡史』 岩波文庫  
 マキアヴェルリ著，大岩誠訳『ローマ史論』 岩波文庫  
 マキアヴェリ著，池田廉訳『君主論』（世界の名著16） 中央公論社  
 ウォールバンク著，吉村忠典訳『ローマ帝国衰亡史』 岩波書店  
 ボールズドン編，長谷川博隆訳『ローマ人』 岩波書店  
 野上素一，金倉英一共著『沈黙の世界史 4 イタリア エトルリア・ローマ・ポンペイ』 新潮社  
 弓削 達『ローマ帝国の国家と社会』 岩波書店  
 弓削 達『ローマ帝国論』 吉川弘文館  
 佐藤武夫『ヨーロッパの劇場』 相模書房  
 鈴木一州，「いわゆるセルウィウスの改革について」『西洋古典学研究』 XVII 岩波書店  
 三橋富治男『トルコの歴史』 紀伊国屋書店  
 千藤 淳『ローマ』 保育社

また，この度お世話になった三田のイタリア大使館，ローマの Istituto Giapponese di Cultura，千代田区三番町のローマ法王庁に，また ENIT（イタリア政府観光局）のイッポリト・ヴィンチエンティ・マレリ，京都大学の野上素一，東京外国語大学の佐野敬彦の各氏に心から感謝の意を表する。